

接触場面のLINEの会話における相づちの機能

—日本語母語話者と非母語話者の比較から—

倉田 芳 弥

1. はじめに

近年のソーシャル・ネットワーキング・サービス（以下、SNS）の普及により、コミュニケーションは多様化している。SNSの一つであるLINEは通話やチャットが無料で利用できるメッセージングアプリで、2011年の利用開始後、若者を中心に広く利用されている（総務省情報通信政策研究所, 2015）¹⁾。このような中、日本語母語話者同士で使われるのはもちろんのこと、日本語母語話者と非母語話者がLINEを用いてコミュニケーションを図る機会も増えていると考えられる。

LINEのやりとりは、書き言葉と話し言葉の両方の要素を持ち合わせており、同期性が比較的高く、チャットの会話の一つとしてこれまで分析が行われている（西川・中村, 2015; 岡本, 2016; 倉田他, 2017他）。本研究では、小林他（2000）を参考に、チャットとはネットワークを介し、主に文字によるメッセージをほぼリアルタイムでやりとりして、会話するシステムと定義し、LINEの会話をチャットの会話の一つとする。

音声会話において、聞き手の反応を示すものの一つとして相づちがある。相づちを用いた話し方は「共話」的な話し方であり（水谷, 1993）、聞き手が会話に積極的に関わる上で、相づちは重要な役割を果たすと言われている。LINEの会話でも、相づちが用いられ、「共感や相手の反応を引き出すなどの相互行為の促進を担っている」（岡本, 2016: 229）と言われるが、LINEの会話では非言語情報が伝えられないため、「相づちを多く用いて自分の態度を示し、積極的に話し手の発話に関わって」（倉田他, 2017: 60）いくことは会話を進めていく上で重要である。

音声会話の接触場面における母語話者と非母語話者の相づちをみると、非母語話者の相づちは、量的な側面よりも質的な側面で母語話者の相づちと異なり（Mukai, 1999）、聞き手として共感や感情を示す相づちが少ない（Mukai, 1999; 楊, 2001; 佐々木, 2002）と言われている。これは、聞き手である非母語話者が話し手の話に関心がない、退屈しているなどと話し手である母語話者が思う危険性があり（村田, 2000）、非母語話者が会話に積極的に参加していないと判断される恐れもある。

LINEの会話では、上述の通り、非言語情報が伝えられないため、声のトーンや表情などがわからないまま会話しなければならず、会話参加者は積極的に参加態度を示すことが必要であるが、接触場面のLINEの会話で、母語話者と非母語話者はどのように相づちを用いて会話を進めているのだろうか。このような関心のもと、本研究では、接触場面のLINEの会話を分析対象とし、相づちの機能について明らかにしたい。

2. 先行研究

2.1 音声会話における相づち

2.1.1 日本語母語場面の相づちの機能

音声会話の相づちの機能については、これまで、聞き手としての役割を表示するという「聞き手役割の表示」(大浜他, 1998)の観点から主に明らかにされてきた。この聞き手役割表示機能は「聞き手が話し手から送られた情報を共有したことを伝える」(堀口, 1997: 42)ことであり、研究者により異なる点はあるものの、「聞いていることを示す」「わかったということを示す」という働きを相づちの機能として認める点では研究者の間でほぼ一致している(松田, 1988; メイナード, 1993; 堀口, 1997他)。Mukai (1999)はこの二つの機能をまとめて「知らせ」機能と呼んでいる。この他の聞き手役割表示機能については、聞き手として何らかの「態度」(Mukai, 1999)を示すことも主な機能として認められている。

相づちの機能については、聞き手の役割を表示するという機能だけでなく、談話を管理し、談話を進めていく役割を担う「談話展開上の機能」(大浜他, 1998)についても指摘されている。

畠(1982)は、相づちは「話し続けて下さい」というマークになることもあれば、「私に発話させて下さい」というマークにもなりうるとし、相づちの話者交替箇所での役割について言及した。

話者交替箇所の相づちの談話展開上の機能を実証的に分析した研究として郭(2003)がある。郭(2003)は、相づちの出現箇所別に聞き手役割表示機能を調べ、「ターンの冒頭」に現れる了解、同意の相づちは、聞き手から話し手へと移行するための談話の重要なストラテジーだとしている。

道聞き談話の相づちを分析した大浜他(1998)は、相づちの直前の発話の情報内容と相づちの表現形式との関係を明らかにし、相づちの表現形式ごとの談話展開上の機能を示した。

これらの談話展開上の機能については、いずれも談話における相づちの出現箇所に着目して分析されていることがわかる。

以上、音声会話の相づちの機能については、これまで、聞き手役割表示機能と談話展開上の機能について分析されており、本研究でも相づちについてこの二つの側面から相づちの機能を明らかにする。

2.1.2 接触場面の相づちの機能

接触場面の母語話者と非母語話者の用いる相づちの聞き手役割表示機能に関する研究として、Mukai (1999)、楊(2001)、佐々木(2002)などがある。

Mukai (1999)は、英語母語の学習者と日本語母語話者による会話を分析対象とし、相づちの機能を上述の「知らせ」と「態度」に分けて分析した。その結果、学習者も母語話者も「態度」よりも「知らせ」の方が多いが、学習者は母語話者よりも「態度」の占める割合が低かった。

楊(2001)は、Mukai (1999)の「知らせ」を「聞いている」「理解・了解」に、「態度」を「同意・共感」「感情の表出」に細分化し、中国語母語の学習者と日本語母語話者による会話を分析した。その結果、学習者の場合、「聞いている」「理解・了解」の相づちがそれぞれ全体の1/3を占めており、3番目に多いのは「同意・共感」で、最も少ないのが「感情の表出」だったという。母語話者は最も多いのが「理解・了解」、その次に多いのが「聞いている」、3番目に多いのが「感情の表出」で、最も少ないのが「同意・共感」であった。両者に異なる傾向は見られたものの、統計上では、「感情の表出」についてのみ、学習者は母語話者より有意に使用が少なかった。

佐々木(2002)では中国語母語の学習者と母語話者の相づちの機能を「聞いている」「理解・了解」「受

容・同意」の3つに分類し比較したところ、学習者は聞いているという相づちは頻繁に打つが、理解や同意を表す相づちが母語話者と比べてかなり少なかったという。

これらの研究結果を見ると、接触場面において母語話者と非母語話者の用いる相づちの聞き手役割表示機能の使用傾向は異なり、「同意・共感」や「感情の表出」といった聞き手の「態度」を示す相づちについては、非母語話者は、母語話者より低い割合で用いるという傾向が指摘できる。「態度」の相づちは聞き手の積極的な会話への参加態度を表す（Mukai, 1999）と言われており、「態度」の相づちをあまり用いない非母語話者は、聞き手として、あまり積極的に参加していないと母語話者に受け取られる可能性がある。また、母語話者と非母語話者の相づちの機能の使用傾向が異なるということは、「接触場面における会話参加者の非対称性を生み出す」（佐々木, 2002: 32）恐れもある。

談話展開上の機能については、村田（2000）、郭（2003）などがある。

村田（2000）は英語話者の初級から上級学習者の相づちを分析した結果、相手の発話を相づちで受けてスムーズにターンを取り、聞き手から話し手へと移行する形は上級学習者にしか観察されず、相手への配慮を示しながら発話権を取るための重要な会話管理の技術の一つだと指摘している。

母語場面と接触場面の出現箇所別の相づちの機能について調べた郭（2003）は、接触場面の「ターンの冒頭」に現れる相づちは、母語場面と比べて頻度が高く、中でも「情報の了解」の機能の割合が高かったという。これは、接触場面において学習者の発話が短いため、ターン冒頭の相づちが増え、母語話者は、学習者の発話に情報の共有を相づちで知らせた上で関連する質問をしたためだとしている。

村田（2000）は質的な分析であり、郭（2003）では、接触場面全体のデータしか示していないため、非母語話者が、話者交替箇所でのどの程度相づちを用いていたのか、母語話者と比べてどのような特徴があるのかといった点は明らかにされていない。

以上、音声会話の接触場面の母語話者と非母語話者の相づちを見ると、聞き手役割表示機能については、母語話者と非母語話者の特徴が明らかにされつつある。しかし、談話展開上の機能については、接触場面においてもその重要性については指摘があるものの、母語話者と非母語話者の具体的な特徴については明らかでない点が少なくない。

2.2 チャットの会話における相づち

2.2.1 母語場面の相づちの機能

チャットの会話における母語話者の相づちの聞き手役割表示機能については、音声会話と同様の機能が見られることが指摘されている（倉田, 2006; 岡本, 2016; 倉田他, 2017）。

倉田（2006）は、PCのチャットの会話における相づちの聞き手役割表示機能について調べた。その結果、「感情の表出」が最も多く、その次に多いのが「理解・了解」、3番目に多いのは「同意・共感」、最も少ないのは「聞いている」であり、音声会話とは異なる使用傾向が見られたという。

岡本（2016）は、LINEの会話の相づちの機能について、「共感や相手の反応を引き出すなどの相互行為の促進を担っている」（岡本, 2016: 229）と指摘している。この点について実証的に分析したのが倉田他（2017）である。LINEの会話を分析した倉田他（2017）は「感情の表出」が最も多く約半数を占め、「聞いている」機能はほぼ現われないとしている。この結果は倉田（2006）の結果と共通しており、非言語情報の欠落やチャットの入力システムの影響などが理由としてあげられている。

相づちの談話展開上の機能については、倉田（2006）、倉田他（2017）などがある。

倉田（2006）は、相づちの送信方法と談話展開との関係について調べたところ、母語話者は相づちを実

質的発話と一緒に送信するよりも、相づち単独で送信することが多かったという。単独送信は、会話の展開の速さを優先させる方略であるが、メッセージのやりとりによれが起り会話の複雑性が増す可能性がある」と指摘している。

倉田（2006）の結果からは、相づちの送信方法には談話を管理する働きがあることが示唆されるが、チャットの会話のどの部分で相づちが単独で送信され、どの部分で実質的発話とともに送信されるのかといった相づちの出現箇所に着目した分析は行われていない。チャットの会話の発話の連鎖の特徴として、隣接ペアが隣り合うとは限らない（Herring, 1999; 細馬, 2002他）ということが指摘されているが、LINEの会話の相づちの談話展開上の機能を明らかにするためには、この点を考慮した分析も必要である。

倉田他（2017）は、LINEの会話の相づちの働きを調べるため、相づちの出現箇所別に相づちの送信方法について調べた。その結果、自分のメッセージを送信した後で相手のメッセージに対して送信する「自己発話後の相づち」の場合、相づちは実質的発話とともに送信されることが多く、どのメッセージに対する相づちかわかりやすくしていた。一方、「相手発話後の相づち」の場合、相づちを単独送信して早く反応を示すことが多く、送信方法には異なる傾向が見られたとしている。

倉田他（2017）は、Herring（1999）などの指摘するチャットの会話の発話の連鎖の特徴を考慮した分析であり、相づちの出現箇所の状況に合わせて送信方法が選択され、LINEの会話に特徴的な談話を管理していることが明らかとなった。しかし、分析枠組みに関して、「自己発話後の相づち」以外の相づちにも、離れたメッセージに対して送信している相づちがあるため、分析の枠組みを再考する必要がある。

母語場面のチャットの会話の相づちをみると、聞き手役割表示機能は、PCのチャットの会話とLINEの会話では共通する点が多く、またその結果は、音声会話と異なる傾向が見られる。しかし、談話展開上の機能についてみると、相づち全体の送信方法については、PCのチャットの会話とLINEの会話では異なっており、同じチャットの会話であっても、談話の展開やそこでの相づちの働きは、使用する媒体によって異なる可能性がある。

2.2.2 接触場面の相づちの機能

接触場面のチャットの会話における相づちについては、倉田（2006）がある。上級以上の非母語話者と母語話者の会話を対象とし、相づちによる談話管理について、相づちの機能や送信方法などの点から調べた。その結果、相づちの聞き手役割表示機能については、母語話者、非母語話者ともに「理解・了解」「感情の表出」が多かった。「理解・了解」はチャットの会話の母語場面と比べても割合は高く、接触場面の特徴だとしている。

送信方法については、母語話者は、相づちの単独送信の割合と実質的発話とともに送信する割合が半々なのに対して、非母語話者は単独送信の割合が多かったという。母語話者は相づちと実質的発話を一つのメッセージとして送信して、聞き手から話し手に確実に交替し、会話の複雑性を回避する方略を取っていたとしている。一方非母語話者の単独送信は、早く反応を示せる方略であるが、会話の複雑性が増す可能性があるという。

倉田（2006）は、チャットの接触場面の相づちの聞き手役割表示機能を明らかにし、また、相づちの送信方法には談話を管理する働きがある可能性を示唆した。しかし、談話展開上の機能について明らかにするためには、チャットの会話の発話の連鎖の特徴を考慮に入れ、相づちの出現箇所に着目し、箇所ごとの送信方法を詳細に分析する必要がある。

また、接触場面のLINEの会話を対象とした相づちの研究は管見の限りないようである。母語場面の

チャットの会話の研究結果をみても、PCのチャットの会話とLINEの会話とでは共通する点もあれば、異なる点も見られるため、接触場面においても、PCのチャットの会話の分析だけでなく、LINEの会話を対象とした分析も必要である。

そこで、本研究では、接触場面のLINEの会話における日本語母語話者と非母語話者の相づちの働きを明らかにすることを目的とする。

3. 研究課題

本研究では、接触場面のLINEの会話における日本語母語話者と非母語話者の相づちの機能について、聞き手役割表示機能及び談話展開上の機能の2点から明らかにするため、以下の研究課題を設ける。

課題1 接触場面のLINEの会話における日本語母語話者と非母語話者の相づちの聞き手役割表示機能について使用傾向に違いは見られるか。

課題2 接触場面のLINEの会話における日本語母語話者と非母語話者の相づちの出現箇所と送信方法の関係からみて、談話展開上の機能に違いは見られるか。

4. 研究方法

4.1 データ

本研究は、日本語母語話者8名と非母語話者6名による計8組の友人関係にある二者間のLINEの会話を分析対象とする。調査対象者は全員女性で、年齢は22～33歳である。非母語話者は全員中国語母語話者で、日本語のレベルは上級以上である。自然会話を分析対象とするため、調査協力者には調査依頼時点より前に行った会話をデータとして提出してもらった。収集データの量は調査協力者により異なるため、データは1組あたり直近の500メッセージを上限とし、計2930メッセージ（日本語母語話者1385メッセージ、非母語話者1545メッセージ）を分析対象とした。LINEの会話は2015年3月～2017年6月に行われたものである。

4.2 相づちの定義及び範囲

堀口（1997: 77）は、相づちを「話し手が発話権を行使している間に聞き手が話し手から送られた情報を共有したことを伝える表現」としている。チャットの場合、相づちを送信するタイミングは、話し手の発話権行使中とは限らない。そこで本研究では、相づちを「話し手から送られた情報に対して、聞き手として反応する表現」と定義する。話し手が積極的に応答を求めたものに対する応答（小宮, 1986）、つまり質問、呼びかけ、命令や要請の表現等に対する返答は、相づちとしない。本研究の分析対象とする相づちの種類は、堀口（1997）、楊（2001）を参考に、「相づち詞」「繰り返し」「言い換え」「先取り」「意見感想」としたが、「言い換え」及び「先取り」は本研究のデータに該当するものはなかった。以下、「言い換え」、「先取り」以外の例を示す。例はいずれも本研究のデータからのものである。

(1) 相づち詞：感声的表現・概念的表現（小宮, 1986）

感声的表現：あー、ええ、へえ、うん、おっ、ほお等、感声的で概念を表さない表現。

概念的表現：そう、なるほど、確かに、すごい、本当、まじ、うそ等、もとは概念を表す言語形式であるが感動詞的に用いられるもの。

(2) 繰り返し：話し手のメッセージの全部または一部を繰り返すもの。

NNS5：ん！痒みと詰まってる感じがほぼ毎日続いているの！そして、実はこの三年間ずっとこんな感じだよ！（後略）

JNS6：3年間も（後略）

- (3) 意見・感想：「話し手の発話に対して、コメントを述べるような短い発話」（楊, 2001: 48）で、相づち詞の「概念的表現」（小宮, 1986）に準ずるもの。例えば、うける、わかる、やばい等。

本研究では、絵文字や顔文字等、非言語的要素は分析対象外とする。スタンプについては、言語的要素を含むスタンプで、相づちとして機能しているものは、相づちに含めることとした。しかし、今回対象とするデータには、該当するものはなかった。

相づちの認定については、分析対象の2割について、筆者と日本語教育を専門とする研究協力者が、それぞれ相づちを認定し、Kappa係数を求めたところ、 $k = .94$ であった。不一致のものについては、協議の上、相づちを決定し、残りの相づちの認定は筆者が行った。

4.3 課題の分析方法

4.3.1 課題1の分析方法

課題1の聞き手役割表示機能は、楊（2001）の分類に従い「聞いている」「理解・了解」「同意・共感」「感情の表出」の4つに分類し、割合を求める。また4つの機能について、母語話者と非母語話者を2群としてT検定を行い、統計的な違いが見られるかを調べる。以下に各機能の例を示す。

- (1) 「聞いている」：話し手のメッセージを「聞いている」ことを示し、話を続けることを促す機能。

NNS3：今後の課題は、反省やインターアクションの不足を検討して、（中略）今後はお子様の間に話し合いながら作品を作って、

JNS3：うんうん

NNS3：私は今回のWSで、お子様の間に話しやすいかなと感じた。

- (2) 「理解・了解」：話し手のメッセージについて理解したこと、了解したことを示す機能。

JNS4：休んだー（笑）

NNS4：そっか！ちなみに、〇〇先生の授業は来週木曜日やるの？

- (3) 「同意・共感」：話し手のメッセージに同意や共感の気持ちを示す機能。

NNS2：それはよくあります。PPTをわかりやすくしたくて、ずっと修正し続けて

JNS2：そうそう～

- (4) 「感情の表出」：話し手のメッセージに感じた驚き、怒り、喜び、悲しみなど様々な感情を示す機能。

JNS5：いまタクシーで向かってまーす

NNS5：ええ！電車でいいよ！

機能は各相づちについて主たる機能として一つの機能をコーディングした。同じ機能の相づちが連続する場合は、1つの相づちとし、機能も1つコーディングし、異なる機能の相づちが連続する場合は別々の相づちとして認定し、機能も別々にコーディングした。相づちの認定同様、相づちの機能についてもKappa係数を求めたところ、 $k = .86$ であった。

4.3.2 課題2の分析方法

課題2では、相づちの談話展開上の機能を探るため、隣接ペアが隣り合うとは限らない（Herring, 1999; 細馬, 2002他）というチャットの会話の発話の連鎖の特徴を考慮に入れ、相づちの出現箇所別の送

信方法を調べ、出現箇所と送信方法に関係があるかをみる。これを母語話者、非母語話者それぞれに行い、両者に違いが見られるか、見られる場合それぞれの談話展開上の機能を明らかにする。具体的な分析の手順を以下に示す。

(1) 相づちの箇所別の分類

相手のメッセージとそれに対する相づちが出現する位置に着目して、相づちを以下の「直後の相づち」と「非直後の相づち」の2種類に分ける。分類の際には、相づちの前後において、発話の連鎖がどのようになっているかを複数メッセージにわたって調べ、その中で、相づちがどのメッセージに対して送信されたものかを特定する。

①直後の相づち

会話例1のように相手のメッセージに対する相づちがその直後に出現するものを「直後の相づち」とする。

会話例1 直後の相づち

122 15:16 NNS3 オッケー！それから、私は相談室のサブコンピューターを応募したので、総会の日にも話し合える。

→123 15:16 JNS3 そうなのね笑

*左から、メッセージ番号、送信時間、メッセージ送信者、メッセージ送信内容を表す。また下線は相づち、「→」は注目すべきメッセージを示す。以下の会話例も同様。

②非直後の相づち

会話例2のように離れたメッセージに対して送信される相づちを「非直後の相づち」とする。会話例2では、242の「おっ」という相づちは、239の「明日六本木の中国大使館にちょっと行くから、(後略)」という発話に対するもので、離れたメッセージに対して相づちを送信している。このように、「非直後の相づち」は、発話の連鎖が複雑な箇所に現れる相づちであると言える。

会話例2 非直後の相づち

239 23:37 NNS5 明日六本木の中国大使館にちょっと行くから、JNS5ちゃんは仕事終わったら、行くな、私そこで勉強するよ！

240 23:37 JNS5 金曜は行かないのー！！(後略)

241 23:37 JNS5 勉強しないとね！！笑

→242 23:38 JNS5 おっ、中国大使館あるんだー

「非直後の相づち」には、相手のメッセージとそれに対する相づちの間に、a. 話し手のメッセージが挿入されるもの、b. 相づち送信者のメッセージが挿入されるもの(会話例2の相づち参照)、c. 話し手のメッセージと相づち送信者のメッセージの両方が挿入されている場合がある。

(2) 送信方法の分類

送信方法については、倉田（2006）、倉田他（2017）に従い、相づちだけでメッセージを構成して送信しているもの（「単独」）と相づちと実質的発話を一緒に送信しているもの（「相づち+実質的発話」）に分類する。

(3) 相づちの出現箇所と送信方法の関係

相づちの出現箇所別の送信方法を調べ、その割合を求める。また統計上相づちと出現箇所と送信方法に関連があるかどうか、Fisherの正確確率検定を用いて確認する。

5. 結果

5.1 聞き手役割表示機能

本研究のデータにおいて、日本語母語話者の相づちは、送信メッセージ1385中70回（100メッセージあたり5.1回）、非母語話者の相づちは送信メッセージ1545中67回であった（100メッセージあたり4.3回）。非母語話者の方がわずかに少ないものの、ほぼ同程度、相づちを使用している。日本語母語話者と非母語話者の相づちの聞き手役割表示機能を図1に示す。

日本語母語話者は、「理解・了解」が最も多く（41%）、次に多いのが「感情の表出」（34%）、その次が「同意・共感」（20%）である。「聞いている」は4%と少ない。

一方、非母語話者も、最も多いのは「理解・了解」（51%）で、次が「感情の表出」（30%）で、その次が「同意・共感」（19%）で、「聞いている」は0%であり、機能の使用割合の順は母語話者と同じである。

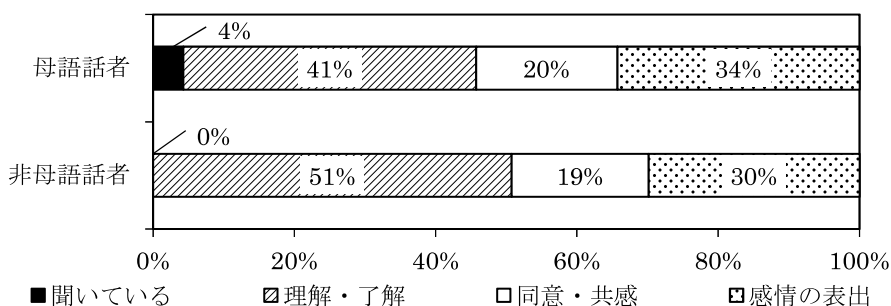


図1 聞き手役割表示機能（日本語母語話者・非母語話者）

次に母語話者と非母語話者を2群として4つの機能についてそれぞれT検定を行ったが、いずれも有意差は認められなかった。つまり、接触場面において母語話者と非母語話者の相づちの機能の使用傾向は同じだといえる。

5.2 談話展開上の機能

相づちの出現箇所別にみた相づちの送信方法について、表1に日本語母語話者の結果を、表2に非母語話者の結果をそれぞれ示す。

まず表1を見ると、母語話者は、相づち全体では、相づちと実質的発話を一緒に送信するものが73%で、相づち単独で送信するものが27%であり、相づちと実質的発話を一緒に送ることの方が多。次に、「直

後の相づち」と「非直後の相づち」に分けて送信方法をみると、「直後の相づち」の場合、相づち単独で送信する割合は35%、相づちと実質的発話を一緒に送信する割合は65%である。一方、メッセージと相づちが離れている「非直後の相づち」については、相づちを単独で送信する場合は、9%に過ぎず、実質的発話とともに送信している割合は91%である。母語話者の場合、メッセージとそれに対する相づちが連続する場合（「直後の相づち」と、離れている場合（「非直後の相づち」と）では、送信方法に異なる傾向が見られる。この点について、統計上有意であるか、Fisherの正確確率検定を行ったところ、有意差が認められた（ $P=0.02$, $P<.05$ ）。つまり、母語話者の場合、相づちの出現箇所と送信方法には関連性が認められ、出現箇所により送信方法を変えていると言える。

表1 出現箇所別にみた相づちの送信方法（母語話者）

	単独	相づち+実質的発話	計
相づち全体	27% (19回)	73% (51回)	100% (70回)
直後の相づち	35% (17回)	65% (31回)	100% (48回)
非直後の相づち	9% (2回)	91% (20回)	100% (22回)

続いて、非母語話者の相づちの送信方法についてみると（表2参照）、相づち全体では、実質的発話と一緒に送信する割合が全体の90%を占め、相づち単独で送信する割合は10%に過ぎない。「直後の相づち」と「非直後の相づち」に分けて送信方法をみると、「直後の相づち」は、「相づち+実質的発話」が90%、「単独」が10%であり、また「非直後の相づち」の場合「相づち+実質的発話」は88%、「単独」は12%と、相づちの出現箇所によって大きな違いは見られない。母語話者同様、Fisherの正確確率検定を行ったところ、有意差は認められなかった（ $P=1.00$, $P>.10$ ）。つまり、非母語話者の場合、「直後の相づち」か「非直後の相づち」という相づちの出現箇所の違いより、送信方法を変えていないということが言える。

表2 出現箇所別にみた相づちの送信方法（非母語話者）

	単独	相づち+実質的発話	計
相づち全体	10% (7回)	90% (60回)	100% (67回)
直後の相づち	10% (4回)	90% (38回)	100% (42回)
非直後の相づち	12% (3回)	88% (22回)	100% (25回)

6. 考察

6.1 聞き手役割表示機能

接触場面の日本語母語話者と非母語話者の相づちの聞き手役割表示機能の使用傾向に、有意差は見られなかった。

本結果において、母語話者と非母語話者の相づちに違いが見られなかった理由としては、LINEの会話が文字による会話であることが可能性の一つとしてあげられる。音声会話では、相手の発話に対して、瞬時に反応しなければならないのに対して、LINEの会話では、相手のメッセージを見てから、相づちで反

応を示すまでに、文字として入力して、送信するという過程がある。メッセージを受信しても、すぐに応答できる状況ではなく、返信自体が遅れる場合もある。このようにLINEの会話は、相づちを送信するまでに時間的な猶予があると言える。そのため、母語話者、非母語話者双方がメッセージを調整する度合いは大きくなり、両者の相づちの聞き手役割表示機能が似た傾向を示している可能性がある。

次に、母語話者と非母語話者の聞き手役割表示機能の特徴について見る。

本データで、母語話者、非母語話者ともに、最も多いのは「理解・了解」であった。「理解・了解」は、相手の話がわかったことを知らせるものであり、接触場面では情報伝達を正確に行うことが重視されていることがわかる。「理解・了解」が多いという結果は、LINEの母語場面を分析した倉田他（2017）とは異なり、音声会話の接触場面を分析した楊（2001）の結果と類似することから、接触場面に共通する結果であると言える。

また、この結果は、中国語母語話者の参加する接触場面であることの影響も考えられる。体験談の終結部を分析した佐々木（2010）、終助詞「ね」を分析した楊（2008）は、日本語母語場面と比べ、中国語母語話者の参加する接触場面では、会話参加者間の共感を作り出す共感構築的側面よりも情報のやりとりを遂行する情報交換的側面が強いと指摘している。聞き手役割表示機能のうち、「聞いている」「理解・了解」の機能は、正確な情報伝達に必要な情報交換的側面が強い機能であると言える。本研究は、中国語母語話者が参加するLINEによる接触場面であるが、LINEの会話においても、中国語母語話者が参加することの影響により、情報交換的側面が強く現れた可能性が指摘できる。

会話例3は非母語話者の、会話例4は母語話者の用いる「理解・了解」の相づちである。会話例3ではJNS1がケーキを買おうと思っていたが、ケーキ屋が閉まってしまったという話をしているところである。348でJNS1がケーキをスーパーで買うことにするとメッセージを送ると、NNS1が349で「そっか」という「理解・了解」を表す相づちを用いている。この相づちは必ずしも必要ではなく、単に「スーパーでまだ買えるんだ」と送信してもよいところであるが、理解・了解の相づちを用いて、明確に相手のメッセージを理解したことを示している。

会話例3 理解・了解の相づち（非母語話者）

- 348 18:04 JNS1 間に合わなかった…
スーパーで買うことにする
- 349 18:05 NNS1 そっか、スーパーでまだ帰るんだ
- *349の「帰る」は原文のまま。「買える」の変換ミスと推測される。

会話例4は、体調の優れないNNS3をJNS3が気づいている場面である。情報伝達が重要な場面というよりは、相手の立場を思いやる場面であるにも関わらず、JNS3は209で、「外食が多かったかも」というNNS3の発言に対して「そっか」と「理解・了解」の相づちを送信している。この相づちも、必ずしも必要というわけではないが、このような場面においても「理解・了解」の相づちを用いて、相手の話をどこまで理解したかということを明確に示しつつ、話を進めていることがわかる。

会話例4 理解・了解の相づち（母語話者）

- 207 19:07 JNS3 ○○の方も、無理にやらないで良いからね。早く良くなりますように！
- 208 19:13 NNS3 ありがとう、JNS3ちゃん。
最近外食が多かったかも。
- 209 19:32 JNS3 そっか。お母さんも帰ったばかりだし、無理しないでゆっくり休んでね。

聞き手役割表示機能の中で2番目に多かったのは、母語話者・非母語話者ともに、「感情の表出」であった。倉田他（2017）でも、「感情の表出」は、多く用いられており、LINE会話では、「感情の表出」が多く用いられることが特徴としてあげられる。

「感情の表出」機能が比較的多く用いられる理由としては、LINEの会話は非言語情報が欠落しており、声のトーンや表情を伝達できないことの影響があげられる。チャットの会話では、非言語情報が伝達されないため、顔文字が多く使用されると言われているが（Werry, 1996）、顔文字など非言語的な要素により態度を伝達するだけでなく、「感情の表出」という相づちを用いて言語的な側面からも積極的に自分の態度を示していると言える。

会話例5は非母語話者の用いる「感情の表出」の相づちである。驚きのトーンなどがLINEの会話では伝達できないため、8で驚きを表す「ええ？」という「感情の表出」の相づちを送信し、NNS4の心情を示している。

会話例5 非母語話者の用いる相づち（感情の表出）

- 6 11:38 NNS4 JNS4、今日学校に来ましたか？
- 7 12:01 JNS4 来てます！今授業終わった！
- 8 12:21 NNS4 ええ？何の授業ですか？

3番目に多かった「同意・共感」は、母語話者は20%、非母語話者は19%だった。「同意・共感」は、「感情の表出」と同様に聞き手の態度を示すものであるが、「感情の表出」よりも全体に占める割合は低かった。「同意・共感」と「感情の表出」では、「感情の表出」の方がより具体的に自分の心情を表すものであり、LINEの会話においては、「同意・共感」よりも「感情の表出」の相づちを多用し、会話へのより積極的な参加態度を示していると言えよう。

最後に、非母語話者には見られず、母語話者にもほとんど見られなかった「聞いている」は、LINEの会話の母語場面でもほとんど見られない（倉田他, 2017）。LINEの会話では、一文字ずつ共有画面にメッセージが表示されるのではなく、ある程度、意味の塊ごとにメッセージを送信するため、「聞いている」という相づちを送信できる箇所が限られることが、理由の一つとしてあげられる。

また、LINEには、メッセージの受け手がメッセージを見ると相手の画面に「既読」と表示される既読機能がある。話を促す機能はないが、既読機能により「メッセージを見た」という情報は伝達されるため、その点では、「聞いている」機能と同じ役割を果たしている。「聞いている」機能がほぼ現れないことの一因として既読機能も考慮する必要があるだろう。

6.2 談話展開上の機能

相づち全体の送信方法については、母語話者、非母語話者ともに相づちと実質的発話を一緒に送信することが多かった。実質的発話を一緒に送信する方法は、入力に時間がかかるが、相づちがどのメッセージに対するものか明確になり、わかりやすいやりとりが可能になる。接触場面のLINEの会話では、反応の早さより、会話の展開の分かりやすさを重視していると言える。

次に相づちの出現箇所別にみた送信方法の特徴について見る。

母語話者の場合、「直後の相づち」と「非直後の相づち」とでは送信方法が有意に異なることが明らかとなった。母語話者は、離れたメッセージに対して送信される相づちの場合（非直後の相づち）では、相づちを実質的発話とともに送信することで、どの発話に対する相づちかわかりやすくしている。一方、直前のメッセージに対して送信される相づちの場合（直後の相づち）、早く反応することを優先して、単独送信を用いることが増える。

LINEの会話の母語場面を分析した倉田他(2017)では、「自己発話後の相づち」は「相づち+実質的発話」が多く、「相手発話後の相づち」は「単独」が多いとしており、母語場面の影響が見られた可能性がある。今後、本研究の出現箇所の枠組みに揃えた母語場面と比較する必要があるだろう。

会話例6に母語話者による非直後の相づちの例を示す。151でNNS3が送信した共同発表の内容に関するメッセージに対してJNS3は153で相づちを実質的発話とともに送信している。この相づちを「そうだね。」と相づちだけで単独送信した場合、151に対する相づちか、152のJNS3と同じ名前の人がいるという別の話題に対する相づちなのがわからなくなる。153で相づちと実質的発話を一緒に送信することにより、この相づちが151に対するものであると判断することができる。このように相手のメッセージと相づちが離れている発話の連鎖が複雑な箇所では、相づちを実質的発話とともに送信することにより、メッセージとそれに対応する相づちを認識しやすくし、相手の認知的負荷を低減しているといえる。

会話例6 非直後の相づち（相づち+実質的発話）

- | | | | |
|------|-------|------|---|
| 151 | 16:57 | NNS3 | そうね。私は実践報告70%、展望30%を設定したいけど、いいかどうかよくわからない。なぜかといえば、(中略) そうすると、今後のWSのうち、〇〇の方法を中心に考えてみればいいかなと思う。 |
| 152 | 17:01 | NNS3 | 別の話だけど、さっきチューターのシフトを見て、新m1に中、〇〇(JNS3と同名) もいるそうだ。笑 |
| →153 | 17:09 | JNS3 | <u>そうだね</u> 、展望ばかり大きすぎてもやはりだめだからNNS3ちゃんが言う通り、結果：展望=7:3が適切だと思うよ |

会話例7は母語話者が単独で送信した「直後の相づち」の例で、JNS3とNNS3は共同発表の案について検討している。57の「あっ、そうなのね。」という相づちは直前の56に対するものである。JNS3は、自分の意見を述べている(53)途中で、NNS3が自分と異なる意見を割り込んで開始した(54)と受け取り、自分の意見をまず述べたい旨を明確に述べる(55)。これに対し、NNS3が56で、JNS3に対して賛成を示すメッセージを送信したことにより、JNS3は勘違いしていたことに気づき、相づちを送信する。ここでJNS3は、「あっ、そうなのね。」(感情の表出、理解・了解)と相づちを単独送信して、すばやく反応を示している。さらに、NNS3が賛成していると知ると、59で「うんうん」と「聞いている」という相づちを

会話例 7 直後の相づち (単独)

- 53 14:23 JNS3 今回の発表会や作品づくりを通して行われたやり取りの種類を整理して
- 54 14:23 NNS3 私は今日少し先生方のコメントを振り返って、
- 55 14:23 JNS3 ちょっと待って！先にわたしの意見を最後まで言わせて
- 56 14:24 NNS3 ○○のテーマ、私も賛成！
- 57 14:24 JNS3 あっ、そうなのね。笑
- 58 14:24 NNS3 先生方もすごく興味深いと言われた。
- 59 14:24 JNS3 うんうん

単独で送信して、自分の話を展開せず、相手の話を促す姿勢に転じたことを明確に示している。

以上のように母語話者の相づちは、発話の連鎖が複雑な箇所では相手の認知的負荷に配慮したり、発話の連鎖が複雑でない箇所では、必要に応じて、同期性を高めたり、話題を展開しないなど様々な働きを担っている。

非母語話者についてみると、「直後の相づち」と「非直後の相づち」では送信方法に違いは見られず、相づちを実質的発話とともに送信する方法が取られており、単独送信はほとんど見られなかった。非母語話者の相づちには、単独送信して素早く反応を示し、会話の同期性を高めるといった働きは見られず、分かりやすさを最優先した働きを担っているといえる。

このように、母語話者と非母語話者の用いる相づちの談話展開上の機能には異なる傾向が見られた。

7. まとめと今後の課題

本研究では、接触場面のLINEの会話の相づちの機能について聞き手役割表示機能と談話展開上の機能の2点から分析した。

その結果、聞き手役割表示機能については、母語話者と非母語話者の使用傾向に有意差は認められず、両者の用いる機能の使用傾向は似ていた。

音声会話の接触場面では、母語話者と非母語話者の異なる相づちの使用が報告されており、今回の結果はLINEの会話であることの影響が考えられる。音声会話のようにその場ですぐに反応しなければならぬのに対して、LINEの会話は、文字による会話のため、音声会話と比べて、メッセージを受信してから相づちを返信するまでに時間的猶予があり、送信内容を検討した上で送信できる場合もある。母語話者と非母語話者の双方が調整しあうことで、両者の機能の使用傾向が似た可能性がある。

母語話者、非母語話者の聞き手役割表示機能についてみると、両者ともに「理解・了解」機能が最も多く、その次に多いのが「感情の表出」であった。接触場面において、母語話者と非母語話者の双方が同じように「理解・了解」の相づちを多用し、情報伝達の正確さを重視してわかりやすさを優先していたと言える。また、この点については、中国語母語話者の参加する接触場面であったことが影響し、情報交換的側面の強い機能が多くなった可能性も示唆される。「感情の表出」は、音声会話では、非母語話者の方が母語話者より使用が少ないと言われているが、本結果では母語話者、非母語話者ともに比較的多く用いて

いた。これは倉田他（2017）の指摘にもあるように非言語情報が欠落するLINEの会話の特性による影響が考えられ、母語話者と非母語話者の双方が、「感情の表出」の相づちを用いて積極的に自分の態度を示して会話に参加していたと言える。

次に談話展開上の機能に関して、出現箇所別に相づちの送信方法を見ると、母語話者と非母語話者では、異なる傾向が見られた。母語話者の場合、「直後の相づち」と「非直後の相づち」とでは送信方法が有意に異なることが明らかになった。「非直後の相づち」では、ほぼ実質的発話とともに送信されるのに対して、「直後の相づち」では、相づちの単独送信の割合が増える。出現箇所により、送信方法を変え、素早く反応を示す必要があるときや、話題を自分では広げたくない場合は、単独送信によって会話の同期性を高めたり、話題の展開をとどめたりする。このように個々の談話の状況に合わせて柔軟に送信方法が選択されていた。

一方、非母語話者については、このような相づちの出現箇所別の送信方法の使い分けは見られなかった。常に相づちと実質的発話と一緒に送信して、どのメッセージに対する相づちかを認識しやすくすることで、相手の認知的負荷を低くすることを最優先していることが明らかとなった。

以上、聞き手役割表示機能と談話展開上の機能をみると、情報伝達の正確さを優先し、分かりやすい会話の展開を目指したものと相づちが機能していることが明らかになった。本結果は、LINEという媒体の特性に合わせながら、母語話者と非母語話者双方の分かりやすさを目指した会話展開の特徴を相づちの機能から明らかにしたといえる。

本研究で対象とした接触場面のデータは限られており、非母語話者の単独送信の相づち自体が少なかった。このため、非母語話者の出現箇所別の送信方法に差が見られないという本研究の結果については、今後さらにデータを増やして検討する必要がある。

また、今後は母語場面と接触場面の日本語母語話者の相づちを比較し、母語話者が接触場面でどのように調整しているのかを明らかにしたい。

付記

本研究は、科学研究費基盤研究（C）「LINEをプラットフォームとした多言語多文化社会におけるネットワーク構築」（平成28年度～30年度 課題番号：16K02803（研究代表者：佐々木泰子）による研究の一部である。

謝辞

本論文を執筆するにあたり多くの貴重なご助言を下さいました佐々木泰子先生をはじめ、科学研究費基盤研究で一緒にさせて頂いている先生方、査読者の方に心より感謝申し上げます。

注

1) 2014年現在のLINEの国内の利用率は、55.1%であり、20代は90.5%である。

参考文献

- 島弘巳 (1982) コミュニケーションのための日本語教育 月刊言語, 11(13), 56-71.
- Herring, S. (1999) Interactional Coherence in CMC. *Journal of Computer-Mediated Communication*, 4(4).
(<http://onlinelibrary.wiley.com/doi/10.1111/j.1083-6101.1999.tb00106.x/full>) (2017年12月14日アクセス)
- 堀口純子 (1997) 日本語教育と会話分析 くろしお出版
- 細馬宏通 (2002) 相互行為とメディアチャットという「会話」はどのような時空間構造を持つかー 相互行為の社会心理学 北樹出版, 179-197.
- 郭末任 (2003) 自然談話に見られる相づち的表現ー機能的な観点から出現位置を再考した場合ー 日本語教育, 118, 47-56.
- 小林久美子・安藤玲子・伊部規子 (2000) 付録インターネット用語の解説 坂元章(編) インターネットの心理学ー教育・臨床・組織における利用のためにー 学文社, 175-181.
- 小宮千鶴子 (1986) 相づちの使用の実態 語学教育研究論叢, 3, 43-62.
- 倉田芳弥 (2006) チャットの接触場面における談話管理ー日本語母語話者と非母語話者の相づちの比較からー人間文化論叢, 8, 277-288.
- 倉田芳弥・佐々木泰子・加納なおみ・楊虹・船戸はるな (2017) LINEの会話における聞き手の行動ー相づちの分析からー 社会言語科学会第39回大会発表論文集, 58-61.
- 松田陽子 (1988) 対話の日本語教育学ーあいづちに関連してー 日本語学, 7(13), 59-66.
- メイナード・K・泉子 (1993). 会話分析 くろしお出版
- 水谷信子 (1993) 『共話』から『対話』へ 日本語学, 12-4, 4-10.
- Mukai, C. (1999) The use of back-channels by advanced learners of Japanese: its qualitative and quantitative aspects. 世界の日本語教育, 9, 197-219.
- 村田晶子 (2000) 学習者のあいづちの機能分析ー「聞いている」という信号, 感情・態度の表示, そしてturn-takingに至るまでー 世界の日本語教育, 10, 241-260.
- 西川勇佑・中村雅子 (2015) LINEコミュニケーションの特性の分析 東京都市大学横浜キャンパス情報メディアジャーナル16, 47-57.
- 岡本能里子 (2016) 雑談のビジュアルコミュニケーションーLINEチャットの分析を通してー 村田和代・井出里咲子(編) 雑談の美学ー言語研究からの再考 ひつじ書房, 213-236.
- 大浜るい子・山崎深雪・永田良太 (1998) 道聞き談話におけるあいづちの機能 日本語教育, 96, 73-84.
- 佐々木泰子 (2002) 相談場面の会話にみられるあいづちの機能 日本語学習者と日本語母語話者の談話発達能力過程の研究ー文章・音声の母語別比較ー平成10-13年度科学研究費補助金研究基盤研究 (B) (1)研究成果報告書, 24-33.
- 佐々木泰子 (2010) 接触場面と母語場面ー体験談の終結部から見たその特徴 言語文化と日本語教育, 39, 33-40.
- 総務省情報通信政策研究所 (2015) 平成26年情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査報告書
(http://www.soumu.go.jp/main_content/000357570.pdf) (2017年12月14日アクセス)
- Werry, C.C. (1996) Linguistic and interactional features of Internet Relay Chat. In S.C. Herring(Ed.), *Computer-Mediated Communication: Linguistic, social and cross-cultural perspectives* Amsterdam: John Benjamins Publishing Company, 47-63.
- 楊虹 (2008) 中日接触場面の初対面会話における「ね」の分析: 共感構築の観点から 東京成徳大学人文学部研究紀要, 15, 125-136.
- 楊晶 (2001) 電話会話で使用される中国人学習者の日本語の相づちについてー機能に着目した日本人との比較ー日本語教育, 111, 46-55.

